

ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離

古川 秀夫^{*1} 大東 貢生^{*2}
田中 滋^{*3} 福田 菊^{*4}

The Gap between the needs of volunteer organizations and the student's consciousness

Hideo Furukawa^{*1}, Takao Otsuka^{*2},
Shigeru Tanaka^{*3} and Kiku Fukuda^{*4}

This study pointed out some problems about volunteer activity as follows, through a series of questionnaire survey.

One is that a serious gap exists between the needs of volunteer organizations and the student's consciousness. So, some students are welcomed by volunteer organizations, but others are not welcomed. Another is that careful attention must be paid to imposing social service on students at school curriculums. Although a spontaneous activity experience promotes a volunteer activity after several years, a forced activity experience does not.

Based on results of research, how the problem could be solved was discussed.

1. 問 題

NPO 法 (1998年制定) にもとづく法人格取得団体が全国で5,826団体 (2002年), 団体や個人で活動するボランティアが全国で700万人 (2000年) を超えるようになった。社会生活基本調査 (総務庁1996年) による成人男女のボランティア活動参加率25.3%は, アメリカ (55.5%, 1998年) やイギリス (48.0%, 1997年) に及ばぬまでも, オランダ (24.0%, 1998年) やフランス (23.4%, 1996年) と肩を並べ, ドイツ (17%程, 1996年) や韓国 (13.0%, 1999年) を上回るほどである。

しかしながら, 30代前半までの若い世代の参加率が低く, また小・中・高と学年進行につれて参加率は低くなる傾向にあるようだ。学校の時間割において最も余裕があり, ボランティアとしての活躍が望まれるのは大学生である。厳しい経済情勢の中, 高止まりする学費や生活費を補填するためアルバイトを余儀なくされる大学生も少なくないが, 将来の担い手という意味も込め, ボランティア団体の人的補給源としての期待は依然大きい。

そこに棹さすべく出されたのが中央教育審議会の2002年答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」である。答申では, ボランティア活動を「奉仕活動・体験活動」と広くとらえ, 子どもの望ましい人間形成や, 国民がより良く生き, より良い社会を作るためにも推進すべきだとして, 教育場面における社会奉仕活動の導入を求めている。

*1 龍谷大学国際文化学部, *2 佛教大学社会学部, *3 龍谷大学社会学部, *4 龍谷大学国際文化学部

答申は社会奉仕活動の導入に必要な社会的基盤の整備についても言及しているが、そこに1つの問題がある。これまで具体的に社会奉仕活動を担ってきたNPO、NGOなどボランティア団体の側では、受け入れを求められた場合大いにとまどいを感じるのではないか。自発的な意思にもとづくボランティアではなく、半強制的なかたちでしかも時間を限って派遣されてくる学生の受け入れ業務は、通常業務の域を越えるものであり業務遂行の妨げにもなる。将来の恒常的ボランティアを発掘する機会として期待を寄せる側面もあるが、本来のミッションとは異なる公教育の一端を担わされる負担と責任は小さくない。

そもそも、ボランティアを志望して訪れる学生と受け入れ組織の間には大きな意識のギャップが見られる。2000年に実施された調査¹⁾では、学生ボランティアの活動動機は「新しい人と出会いたいから」、「やりたいことを発見したいから」など利己的な傾向が強い。他方、受け入れ組織は「自分自身の学習や成長・啓発のため」といった利己的なものも認めているものの、「人や社会の役に立ちたいから」など利他的な動機による参加を強く期待していた。

大学生がボランティアとして手を挙げれば、その善意を直ちに賞賛され、暖かく受け入れてもらえると考えてるのはあまりに安易なことである。何らの知識、能力も持たないボランティアをトレーニングし、活動推進の戦力とするためには、受入側は相当な苦勞を強いられる。明示的に語られはしないが、受入側にとって来てほしいタイプのボランティアとそうでないボランティアが厳然として存在するのである。

中教審答申の含意する暗黙の仮定にはもう一つ問題点がある。社会奉仕活動の機会や義務を青少年の時期に与えれば、成人したのちも奉仕・ボランティア活動に自発的に取り組むということが本当にあるのだろうか。授業の一環として課されるために、いやいやながら施設や組織の現場に出かけてみたものの、そこでの説明や指示は要領を得ず、活動から何らの達成感も得られない。そんな活動を二度とやりたいと思わないかもしれない。

中教審が最終答申を作成するまでの過程で、ボランティア活動と社会奉仕活動の用語の使い方について、混乱をふまえたやや苦しい工夫が見られる。当初、ボランティア活動の一語で展開する考え方も強かったようなのだが、自発性を含意するボランティアの語の定義からして学校で課すものをボランティア活動とは呼びがたい。そこで、学生の自発性は度外視し、無償性の側面を残した「奉仕・体験活動」というのが前面に出てきたようである。

本研究では、上述の2つの問題点について、調査データをもとに実証的な検討を加えた。第1の問題に関しては、2つの質問紙調査の結果を比較対照した。1つは、ボランティア団体スタッフ対象に1998年実施したものである。もう一つは、2002年に大学生対象に実施したものである。学校で課された奉仕活動が将来の自発的活動に結びつくのかという第2の問題に関しては、大学生調査のみについて分析を加えた。

2. 方 法

(1) ボランティア団体スタッフ対象の質問紙調査

日本国内の国際ボランティア団体について、『NGOダイレクトリー'96』（NGO活動推進センター、1996）記載の373団体を対象に、1998年5～6月に郵送法で行った。有効回答数は174団体で回収率は46.7%であった。詳しい分析結果は既に公表している²⁾。今回の分析に用いた項目は、どのよう

表1 ボランティア活動リスト

- | |
|--|
| 1. 地域での活動（子供会やお祭り、自主防災・防犯活動など） |
| 2. 体育・スポーツ活動（スポーツレクリエーション指導など） |
| 3. 文化・芸術活動（博物館や美術館等の文化施設、伝統的建築物等での説明、美術・音楽の指導など） |
| 4. イベント（コンサートやスポーツ、講演等）の手伝い |
| 5. 自然・環境保護に関する活動（環境美化、リサイクル活動。牛乳パックの回収など） |
| 6. 国際交流・協力に関する活動（難民援助、技術援助、留学生援助など） |
| 7. 社会福祉に関する活動（老人や障害者などに対する介護、身のまわりの世話など） |
| 8. 保健・医療・衛生にかんする活動（患者会組織・病院ボランティアなど） |
| 9. 災害救助活動 |

なボランティアに来てほしいか、または来てほしくないかに関する「自発的に活動できる人」、「あまり活動に参加できない人」など44項目である。各項目について、〈非常に来てほしい〉から〈非常に来てほしくない〉まで7段階評定を求めた。なお、44項目の作成は、どんなボランティアに来てほしいかについて関西のボランティア団体から得た自由記述（1997年3～5月実施の質問紙調査）にもとづいた。

(2) 関西地区の大学生を対象としたボランティア活動に関する質問紙調査

関西地区を広くカバーするように滋賀県立大学、龍谷大学、佛教大学、追手門学院大学、大阪府立大学、神戸学院大学の学生を対象として2002年7～10月の授業中に配布・回収を行った。有効回答数は870であった。今回の分析に用いた項目群の一つは、上記の44項目の内容が学生自身にどれくらいあてはまるか自己評価する44項目であった。例えば、上の「自発的に活動できる人」は「自発的に活動できる」と変え、〈全くそうだ〉から〈全くちがう〉まで7段階評定を求めた。

もう一つは、大学生のボランティア・奉仕活動の経験を尋ねる項目であった。表1のような「地域での活動（子供会やお祭り、自主防災、防犯活動など）」など9種からなる具体的な活動リストを提示し、小中高及び高校卒業後の4つの時期で最も時間と労力をかけたものを、自ら進んでおこなった活動とそれ以外の地域や学校で課された活動と2つに分けて、選択を求めた。

3. 結 果

(1) ボランティア団体のニーズ構造と大学生の自己評価に関する構造

①ボランティア団体のニーズ構造

1998年調査の分析³⁾では、ボランティア団体がボランティア志願者に求めるニーズに関する44項目について、異質な項目を除去するための項目分析、次いで因子分析を行った。その結果、ボランティア団体が大学生等のボランティア志願者に求めるニーズは、表2のように9つに分かれることが見出された。

44項目全体で算出されたアルファ信頼性係数は0.96と一貫性の高いことが示された。しかしながら、ボランティアの基本的性格の一つである「無償性」と負の関係が期待される項目、例えば「2. 物事を損得で考える人」を用意していたが、他の項目全体と正負の相関が見られず、ボランティア・ニーズの背後要因としては位置づけられなかった。さらに「10. 経済的な見返りを期待する人」と「33. 差別的な言動をする人」も相関係数の絶対値が0.20に満たなかったため、これら3項目は

表2 国際ボランティア団体のボランティア・ニーズ構造

因子名称	趣 旨	項 目
協働性	自らの立場や役割をわきまえながらメンバーと相互に調整して活動できること	16. 協調して活動できる人 15. メンバー間の対立をうまく収められる人 18. 団体における自分の役割を理解している人 12. 選り好みをしないで活動できる人 17. ものごとを多角的に視ることのできる人 3. 継続的に活動できる人 13. 約束した時間を守る人 8. 活動へ前向きに取り組める人
事務処理能力	事務的な業務遂行に関して日常的に必要とされる能力	24. 書類づくりなどの事務処理ができる人 23. 帳簿つけなどのお金の管理ができる人 25. 日常生活で使う程度に英語ができる人 22. パソコン（ワープロなど）の操作ができる人 27. 通訳や翻訳ができるほど高度な英語力がある人 20. 活動に役立つ資格がある人 21. 活動に役立つ専門性（技術・知識・能力）がある人
感受・表現性	状況を的確に理解する一方で、自らのアイデンティティに支えられた意思表示ができる	41. 時、場所に応じた言葉づかいのできる人 42. 人に共感することができる人 43. 自己表現ができる人 44. 人の意見に耳を傾けられる人
創造的自律性	指示されるのを待つのではなく、問題を自ら見出し創意工夫を独自に加えながら活動を展開できること	4. 創造的に活動できる人 7. 独創性のある人 11. 自分で問題を発見できる人 9. 一人でも活動を進められる人
試行性	体験参加やインターンシップなどで訪れること	36. ボランティアを体験することが主目的の人 37. 学校、地域、職場、団体などで参加する機会を与えられて来る人
対象関心性	地域やテーマなどの対象に強い関心を持っていること	29. 活動の対象地域に強い関心のある人 30. 活動テーマについて強い関心のある人
現地語能力	英語以外の現地語に関する会話・読解能力	28. 通訳や翻訳ができるほき高度な語学力（英語以外）がある人 26. 日常生活で使う程度の語学力（英語以外）がある人
高関与性	自分の問題としてとらえ関わること	1. 自発的に活動できる人 14. 問題を自分の課題として考えられる人
経験・知識	対象地域に関する経験や知識があること	32. 活動の対象地域における生活経験のある人 31. 活動の対象地域に関する知識のある人

因子分析の対象から除いた。

各項目の因子負荷量から因子の趣旨を解釈し、表2のように因子名を与えた。ほとんどの因子が容易に解釈できるなかで、国際ボランティア団体固有のニーズとして「現地語能力」、また、教育目的による参加を歓迎するかどうかに関する項目から、やや特殊な「試行性」といった因子も抽出された。なお、表2記載の項目から算出したアルファ信頼性係数は、9因子いずれについても.70以上と概して十分高い値を示した。

②ボランティア団体のニーズ構造と大学生の自己評価に関する構造

因子分析結果に解釈を加えることによって表2の結果を得るのが実際の分析プロセスであるが、記述の便宜上、ボランティア団体のニーズに関する因子分析結果を表3として示した。また、ニーズに沿った性質に関する大学生の自己評価を因子分析した結果を表4として示した。

大学生から回答を得た44項目について項目分析をおこなったところ、44項目全体のアルファ信頼性係数は0.90と十分高い値を示したが、当該項目を除く43項目の合計点との相関係数が0.20に満たなかった「2. 物事を損得で考える」、「10. 経済的な見返りを期待する」、「33. 差別的な言動をする」、「37. 学校、地域、職場、団体などで参加する機会を与えられていく」、「38. 健康に不安がある」の5項目は異質なものとして因子分析の対象項目からはずした。残った39項目について、9因子解、8因子解を求めバリマックス回転を施したが、それぞれ最下位の第9因子、第8因子と高い負荷量を示す項目が見出されなかったため、7因子解を採用した(表4)。

表3と表4の因子分析結果を比較することで、以下のようなことが示唆される。

まず、おおまかに言って、ボランティア団体から寄せられるニーズに比べ、学生の自己評価の方が単純構造となっており、あまり分節化していないようである。それはニーズから9因子が抽出されたのに対し、学生の自己評価からは7因子しか抽出されなかったことで端的に示される。

大学生から抽出された第1因子に高負荷する項目は、ニーズの第4因子「創造的自律性」と第8因子「高関与性」の2つの因子に高負荷した項目であった。すなわち、大学生においては「創造的自律性」と「高関与性」が一体のものとなっているようだ。これは「創造的自律性」と呼べばよいと思われる。

同様に因子負荷量の大きな項目に注目してボランティア・ニーズと比較をおこなう。

大学生の第2因子はニーズの第1因子「協働性」にはほぼ一致し、そのまま「協働性」と呼べる。

大学生の第3因子は、英語と英語以外の語学力に関わる項目が高い負荷を示し、これらはニーズの第2因子「事務処理能力」と第7因子「現地語能力」の項目群に重なるものである。因子名称としては「語学力」と呼ぶのがふさわしい。この因子は国際ボランティア団体特有の条件であって、地域福祉など実在する多くのボランティア活動において語学力は必ずしも必要ではない。

大学生の第4因子は、ニーズの第9因子「経験・知識」にはほぼ一致し、「経験・知識」という名称が踏襲できる。

大学生の第5因子は、ニーズの第2因子「事務処理能力」から英語会話や資格を除いた項目から成り、より単純化された「事務処理能力」だと言える。

大学生の第6因子は、ニーズの第3因子「感受・表現性」とほぼ一致する。

大学生の第7因子は、ニーズの第2因子「事務処理能力」に高負荷していた2項目「20. 活動に役立つ資格がある」と「21. 活動に役立つ専門性がある」とに高い負荷を示しており、項目趣旨から「専門性」と呼べるだろう。

ニーズにおいては見出されたにも関わらず、大学生において抽出されなかったのは「試行性」因子であった。項目分析のあと残された「36. ボランティアを体験することが主目的である」はいずれの因子にも高い負荷を示さなかった。

学生の自己評価から抽出された7因子は第1因子から順に「創造的自律性」、「協働性」、「語学力」、「経験・知識」、「事務処理能力」、「感受・表現性」、「専門性」と若干のニュアンスの違いはあるものの、ボランティア・ニーズの構造と概ね重なるものと言える。

表3 ボランティア・ニーズの因子構造^a

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	F 9
16. 協調して活動できる人	.794	.143	.163	.135	.165	.189	.152	.069	.024
15. メンバー間の対立をうまく収められる人	.736	.228	.229	.073	.055	.167	.047	.121	.162
18. 団体における自分の役割を理解している人	.694	.146	.222	.250	.074	.068	.088	.138	.092
12. 選り好みをしてしないで活動できる人	.615	.142	.290	.046	.122	.136	-.08	.108	.081
17. ものごとを多角的に視ることのできる人	.593	.132	.232	.439	.020	.131	.123	.261	.059
3. 継続的に活動できる人	.581	.169	-.04	.280	.190	.029	.149	.119	.021
13. 約束した時間を守る人	.575	.091	.310	.044	.054	.054	.035	.141	.103
8. 活動へ前向きに取り組める人	.545	.118	.231	.429	.132	.122	.026	.123	-.01
5. 中心的なメンバーとして活動できる人	.395	.088	-.153	.272	.229	.027	.276	.313	.117
24. 書類づくりなどの事務処理ができる人	.173	.850	.107	.149	.078	.151	.101	.046	.118
23. 帳簿つけなどのお金の管理ができる人	.122	.810	.017	.101	.074	.131	.008	.045	.136
25. 日常生活で使う程度に英語ができる人	.192	.753	.256	.011	.097	.123	.198	.040	-.121
22. パソコン（ワープロなど）の操作ができる人	.222	.608	.217	.127	-.02	.057	.135	.081	.267
27. 通訳や翻訳ができるほど高度な英語力がある人	.044	.559	.065	.144	-.01	.173	.540	.057	.131
20. 活動に役立つ資格がある人	.256	.408	.154	-.142	.217	-.05	.326	.100	.326
21. 活動に役立つ専門性（技術・知識・能力）がある人	.296	.405	.322	.116	-.06	.049	.294	.248	.383
41. 時、場所に応じた言葉づかいのできる人	.232	.171	.681	.061	.096	.00	.099	.03	.188
42. 人に共感することができる人	.235	.014	.643	.196	.126	.253	.137	.027	.105
43. 自己表現ができる人	.330	.222	.587	.236	.067	.137	.058	.156	.105
40. 日本人としての誇りをもっている人	.113	.169	.551	.00	.241	.057	.050	.053	.104
44. 人の意見に耳を傾けられる人	.446	.153	.548	.369	-.03	.118	.030	.160	-.04
4. 創造的に活動できる人	.422	.086	-.01	.632	.144	.043	.033	.122	.100
7. 独創性のある人	.136	.067	.160	.587	.128	.078	.013	.116	.084
11. 自分で問題を発見できる人	.447	.179	.321	.515	.050	.128	.00	.331	-.01
9. 一人でも活動を進められる人	.364	.166	.176	.378	.177	.109	.072	.082	.145
36. ボランティアを体験することが主目的の人	.159	.074	.222	.003	.735	-.04	-.05	.063	.093
37. 学校、地域、職場、団体などで参加する機会を与えられて来る人	.125	.066	.130	.138	.710	.034	.040	.086	.216
35. 活動場所が家から遠い人	.068	.014	.006	.160	.546	.164	.128	-.08	-.07
29. 活動の対象地域に強い関心のある人	.155	.227	.051	.128	.151	.791	.125	.068	.129
30. 活動テーマについて強い関心のある人	.267	.161	.207	.079	-.03	.674	.208	.176	.118
34. 強い使命感のある人	.193	.146	.229	.049	.222	.257	.047	-.01	.130
28. 通訳や翻訳ができるほど高度な語学力（英語以外）がある人	.080	.273	.151	.025	.089	.222	.862	-.02	.115
26. 日常生活で使う程度の語学力（英語以外）がある人	.215	.407	.263	.019	.132	.127	.413	-.03	-.119
1. 自発的に活動できる人	.405	.132	.012	.242	.099	.004	.045	.688	.00
14. 問題を自分の課題として考えられる人	.301	.041	.177	.208	-.06	.234	-.04	.682	.023
32. 活動の対象地域における生活経験のある人	.063	.187	.233	.191	.245	.283	.126	.023	.551
31. 活動の対象地域に関する知識のある人	.134	.236	.266	.083	.114	.447	.070	.051	.541
39. 肉体労働のできる人	.313	.151	.225	.164	.244	.132	-.02	-.155	.374

a. 網掛けは、400以上の因子負荷量。(N=174)

表4 大学生の自己評価の因子構造^a

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7
4. 創造的に活動できる	.694	.109	.124	.139	.059	.177	.020
5. 中心的なメンバーとして活動できる	.657	.079	.198	.00	.146	.138	.047
3. 継続的に活動できる	.579	.248	.072	.238	.071	.087	.053
8. 活動へ前向きに取り組める	.546	.387	-.04	.349	.024	.116	.038
1. 自発的に活動できる	.528	.334	-.05	.379	.061	.025	.073
9. 一人でも活動を進められる	.507	.110	.122	.147	.099	.097	.085
7. 独創性がある	.501	.121	.161	-.02	.112	.182	.00
11. 自分で問題を発見できる	.452	.355	.063	.214	.169	.100	.051
12. 選り好みをしてしないで活動できる	.419	.248	.140	.205	.028	.00	.133
6. あまり活動に参加できない	-.412	-.01	.074	-.143	.040	-.02	-.08
34. 強い使命感がある	.296	.231	.141	.260	.047	.201	.019
16. 強調して活動できる	.116	.664	-.03	.135	.040	.138	.036
18. グループにおける自分の役割を理解して行動できる	.260	.608	-.03	.097	.123	.290	.059
19. グループの目的に沿った行動が出来る	.198	.591	-.08	.157	.023	.227	.087
14. 問題を自分の課題として考えられる	.264	.527	.021	.308	.060	.103	-.01
17. ものごとを多角的に視ることができる	.313	.520	.086	.082	.167	.236	.112
44. 人の意見に耳を傾けられる	.042	.498	-.09	.074	.042	.494	.002
15. メンバー間の対立をうまく収められる	.339	.462	.152	-.02	.153	.223	.073
13. 約束した時間を守る	.025	.399	-.07	.080	.092	.164	.005
27. 通訳や翻訳ができるほど高度な英語力がある	.108	-.08	.842	.122	.146	-.09	.142
28. 通訳や翻訳ができるほど高度な語学力（英語以外）がある	.100	-.08	.840	.113	.109	-.06	.144
26. 日常生活で使う程度の語学力（英語以外）がある	.125	-.04	.680	.040	.190	.080	.061
25. 日常生活で使う程度に英語ができる	.134	.078	.486	.037	.384	.040	.112
29. 活動の対象に強い関心がある	.267	.265	.055	.820	.092	.090	.002
30. 活動テーマについて強い関心がある	.279	.260	.104	.809	.086	.078	.044
31. 活動の対象に関する知識がある	.305	.107	.153	.421	.225	.149	.285
32. 活動の対象における経験がある	.297	-.06	.197	.346	.214	.142	.299
36. ボランティアを体験することが主目的である	.192	.202	.146	.264	-.03	.038	.062
24. 書類づくりなどの事務処理ができる	.108	.146	.190	.041	.827	.043	.089
23. 帳簿つけなどのお金の管理ができる	.055	.083	.236	.047	.720	.033	.061
22. パソコン（ワープロなど）の操作ができる	.078	.074	.067	.078	.562	.142	.150
35. 活動場所が家から遠い	.053	.121	.069	.113	.135	.010	-.05
41. 時、場所に応じた言葉づかいができる	-.01	.333	-.04	.051	.076	.624	-.05
42. 人に共感することができる	.050	.474	-.01	.184	.00	.582	-.05
43. 自己表現ができる	.269	.281	.104	.030	.175	.535	.036
40. 日本人としての誇りをもっている	.150	.066	-.02	.037	.044	.356	.066
39. 肉体労働ができる	.142	.098	.035	.025	.007	.253	.072
20. 活動に役立つ資格がある	.132	.156	.327	-.01	.169	.076	.604
21. 活動に役立つ専門性（技術・知識・能力）がある	.235	.047	.340	.206	.322	.071	.597

a. 網掛けは、400以上の因子負荷量。(N=870)

(2) ボランティア・ニーズと大学生の自己評価との乖離

因子分析によって見出された構造は似通ったものであったが、それぞれの因子に関してニーズの強さと学生の自己評価の間にどれくらいのギャップが見られるのだろうか。

異なった構造のままで比較することは難しいので、ボランティア団体からのニーズの構造、すなわち9因子を前提として得点化を試みた。

ニーズに関する各項目の7段階評定において、「非常に来てほしくない」1点、「かなり来てほしくない」2点、「どちらかといえば来てほしくない」3点、「どちらとも言えない」4点、「どちらかといえば来てほしい」5点、「かなり来てほしい」6点、「非常に来てほしい」7点として9つの因子それぞれ項目平均値を算出した。学生の自己評価についても、ニーズの9因子構造をもとにして、7段階評定の「全くちがう」1点、「かなりちがう」2点、「ややちがう」3点、「どちらとも言えない」4点、「ややそうだ」5点、「かなりそうだ」6点、「全くそうだ」7点として9つの側面について項目平均値を算出した。

9つの平均値をレーザチャートで示したのが、図1である。

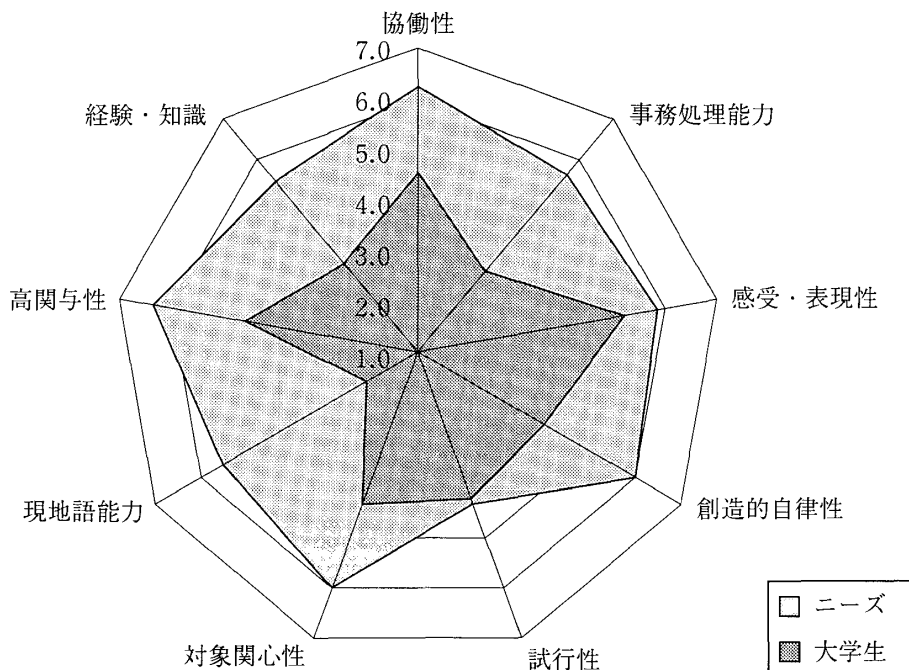


図1 ボランティア・ニーズと大学生の自己評価

一目でわかるように、ボランティア・ニーズは、「試行性」を除き、およそ6点前後になっているのに対し、学生の自己評価で5点を越えたのは「感受・表現性」くらいである。

具体的な選択肢でいえば、ニーズでは「かなり来てほしい」のに、学生の自己評価としては「どちらともいえない」と「ややそうだ」の間くらいでしかなかった。

2点以上の差があったのは、「事務処理能力」、「創造的自律性」、「現地語能力」及び「経験・知識」であった。概してボランティア・ニーズの中核をなすものである。

1点以上2点未満の差の見られたのが、「協働性」、「対象関心性」、「高関与性」で、差が1点未満であったのは「感受・表現性」、「試行性」と周辺的なボランティア・ニーズであった。

ボランティア団体のボランティア・ニーズに応えられるまでの自己評価に大学生は至っていない

ということがうかがわれる。大学生を潜在的なボランティアとして政策的に想定したとしても、ボランティア団体の方からすれば、使いものにならない厄介な存在になりかねないわけである。

(3) 高校卒業後の自発的ボランティア活動経験の有無と自己評価

では、最近の時点においてボランティア活動経験を有する学生とそうでない学生の間でボランティア活動に関する自己評価はどのように異なるだろうか。

19歳以降、すなわち高校を卒業してから表1のボランティア活動リストの中で自ら進んでおこなった活動があるかどうかについて回答した学生が775人いた。そのうち、活動経験のある者が176人(22.7%)、経験のない者が599人(77.3%)であった。回答者をこれら2グループにわけ、9つの因子について自己評価の平均点を計算し、プロットしたのが図2である。

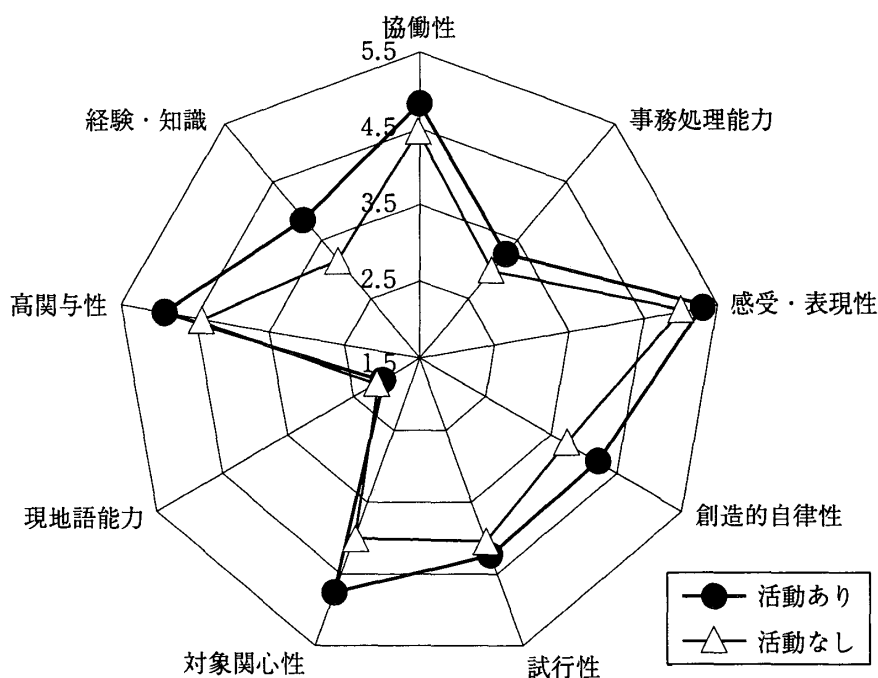


図2 高校卒業後の自発的ボランティア活動経験の有無と自己評価

平均値の差についても検定をおこなったところ、「現地語能力」と「試行性」以外の7つの側面について、経験者の方が有意に高い得点を示していた。とりわけ、「創造的自律性」、「対象関心性」、「高関与性」、および「経験・知識」は0.5点以上の得点差を示していた。

回答者の多くが大学1年生であるので、19歳以降に自発的ボランティア活動経験があるということは、現在も活動していると考えることができる。同世代の大学生であっても、活動をしているかどうかによって、自己評価は大きく異なるということである。

ただし、図1と比較してわかるように、活動している学生であっても、ボランティア団体のニーズに十分応じるほどのレベルには達していないようだ。

なお、この結果は、活動経験ないし活動実態の有無という基準との関連性におけるボランティア適性(大学生・自己評価)尺度の妥当性を相当程度確認させるものであった。

(4) 小学校以来の活動経験とボランティア適性（大学生の自己評価）との関連性

小中高大の4つの時期に行ったボランティア活動経験について、自発的活動経験の有無と賦課的活動経験の有無とを組み合わせると活動経験に関する4類型が構成できることは既に論じた⁴⁾。770人の大学生の中での人数の内訳は、(自発的活動経験あり、賦課的活動経験なし)=88人(11.4%)、(自発的活動経験あり、賦課的活動経験あり)=368人(47.8%)、(自発的活動経験なし、賦課的活動経験なし)=134人(17.4%)、(自発的活動経験なし、賦課的活動経験あり)=180人(23.4%)であった。

ボランティア・ニーズにどれだけ応えられるかに関する大学生の自己評価得点をこの4類型間で比較することにより、自発的、賦課的2つの活動経験がどのようにからみあって大学生のボランティア適性の発達を促しているかが検討できる。

図3は、ボランティア適性の中でも中心的なものの1つといえる「協働性」について、活動経験との関連性を示したものである。黒丸は、小中高大時代のいずれかにおいて、自ら進んでおこなった自発的活動経験のある学生で、白三角は、小中高大のいずれの時期においても自発的活動経験のない学生である。横軸は学校などで課された賦課的活動の経験の有無を示す。

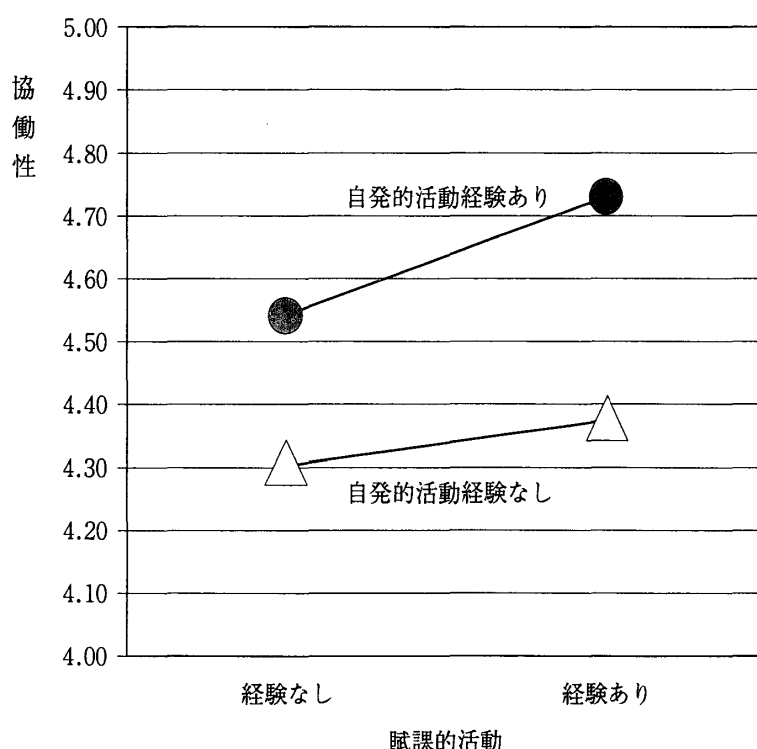


図3 活動経験と協働性

一見してすぐにわかるのは、自発的活動の経験がない学生に比べて、経験のある学生が0.2点以上高い協働性の平均得点を示していることである。そして、自発的活動経験者の方が高い協働性を示すのは、賦課的活動の経験の有無にかかわらず。

さらに、自発的活動経験のない場合は賦課的活動の経験者と未経験者との協働性にあまり違いはないものの、自発的活動経験のある場合は賦課的活動の経験者の方が未経験者よりも0.2点近く高い協働性を示している。つまり、協働性の伸長というのは、まずもって自発的活動経験がなければ期待できないのである。いかに学校などで奉仕活動をあてがっても、自発的活動経験がなければ協

働性は養われないということである。

やや特殊な性質の「試行性」と「現地語能力」を除いた、その他のボランティア・ニーズについても、おおよそ同じ傾向が見出された。すなわち、小中高大いずれかの時期で自発的な活動に踏み出すことがなければ、ボランティア資質に関する成長は望めないようなのである。

(5) 大学生のボランティア活動促進のために小中高で課すべき活動内容

大学生のボランティア活動と正の関連性を持つのは、学校や地域で半ば強制的に課される賦課的活動の経験ではなくてむしろ自ら進んでおこなう自発的活動の経験であることを述べた。しかしながら、賦課的活動から自発的活動へと移行するプロセスについては本調査で用意した項目から分析することはできない。また、自発的活動そのものを教育現場で課すということは自発的活動の語義から言ってもありえない。せいぜい、教育現場でできるのは限られた活動メニューの中からどれにするか選択を許すぐらいである。

そこで、小中高時代に経験した賦課的活動の内容が大学生の自発的ボランティア活動の意欲や活動実践とどのような関連性を有するのかについて分析を試みた。

① ボランティア活動意欲を高めるために小中高で課すべき活動内容

ボランティア活動意欲に関わる項目として「今後あなたはボランティア活動をやってみたい（続けたい）と思いますか。」に対して7段階評定で〈全くやりたくない（続けたくない）〉から〈非常にやってみたい（続けたい）〉までの回答を求める質問項目を用いた。度数分布を検討し、〈全くやりたくない（続けたくない）〉、〈あまりやりたくない（続けたくない）〉、及び〈どちらかというやりたくない（続けたくない）〉を選択した回答者161人をボランティア活動意欲「低」群、また〈非常にやってみたい（続けたい）〉と〈かなりやってみたい（続けたい）〉を選択した回答者188人をボランティア活動意欲「高」群とした。各群が表1にあげた活動を小学校、中学校、高校時代の一つの時期もしくは複数の時期にまたがって経験したかどうかの人数と各群の全回答者数を基礎とした％を算出し、まとめたのが表5である。

ボランティア活動意欲の「低」群と「高」群とで％比がおおよそ2倍以上となり、「高」群の経験者が多かったのは、「体育・スポーツ活動」、「文化・芸術活動」、「イベントの手伝い」、人数は少ないながら「保険・医療・衛生に関する活動」、「災害救助活動」であった。

ボランティア活動意欲の「低」群と「高」群いずれも50％以上が経験していながら、「高」群の方が10％強多かったのは「自然・環境保護に関する活動」であった。

あまり差のなかったのは、「地域での活動」と「社会福祉に関する活動」で、社会奉仕活動として学校などでしばしば取り上げられがちなものであった。

② ボランティア活動を促すために小中高で課すべき活動内容

自発的なボランティア活動をしているかどうかに関わる設問は「(3)高校卒業後の自発的ボランティア活動経験の有無と自己評価」で用いたものと同じである。意欲の高低については、人数を同じようになるようにグルーピングを図ったが、高校卒業後の自発的活動の有無は2値的で「なし」群に対する「あり」群の人数は3分の1に満たなかった。結果を表6にまとめた。

自発的活動「なし」群に対して「あり」群が％比で2倍以上になっていたのは、「体育・スポーツ活動」、「文化・芸術活動」、「イベントの手伝い」、「国際交流」、及び「災害救助活動」であった。

表5 活動意欲「低」群「高」群が小中高で経験した賦課的活動

			ボランティア活動意欲		合計
			低	高	
小中高時代に課された活動内容	地域での活動	N	62	77	139
		%	(38.5%)	(41.0%)	(39.8%)
	体育・スポーツ活動	N	11	20	31
		%	(6.8%)	(10.6%)	(8.9%)
	文化・芸術活動	N	5	12	17
		%	(3.1%)	(6.4%)	(4.9%)
	イベントの手伝い	N	8	23	31
		%	(5.0%)	(12.2%)	(8.9%)
	自然・環境保護に関する活動	N	88	125	213
		%	(54.7%)	(66.5%)	(61.0%)
	国際交流・協力に関する活動	N	5	8	13
		%	(3.1%)	(4.3%)	(3.7%)
	社会福祉に関する活動	N	19	24	43
		%	(11.8%)	(12.8%)	(12.3%)
	保健・医療・衛生にかんする活動	N	1	3	4
		%	(.6%)	(1.6%)	(1.1%)
	災害救助活動	N		3	3
		%		(1.6%)	(.9%)
計			161	188	349

2倍までの差にはなっていないものの、20%近い差の見られたのは「地域での活動」であった。

あまり差の見られなかったのは「自然・環境保護に関する活動」、「社会福祉に関する活動」、及び「保険・医療・衛生に関する活動」であった。

ボランティア活動意欲の高い人たちと活動を実践している人たちとの間で、小中高時代に経験した賦課的活動の内容に共通点と相違点のあることがうかがわれる。もちろん、やりたいということとやるかどうかについて相違が見出されるのは当然ともいえる。やりたいというのはあくまで希望であり、潜在的なものでしかないのである。

しかしながら、活動意欲の高い学生が低い学生に比べ経験率の大きくて、かつ実際に活動を行っている学生が行っていない学生に比べ経験率の大きな活動内容というのは、長期的にボランティア活動促進につながるものだと言うことができよう。その条件に合うのは「体育・スポーツ活動」、「文化・芸術活動」、及び「イベントの手伝い」の3つであった。「災害救助活動」は、参加経験者の絶対数も少なく、災害など緊急事態が前提とされるため、教育機関で恒常的に取り組む活動にはなりにくいと考えられる。

表6 自発的活動「なし」群「あり」群が小中高で経験した賦課的活動

			高校卒業後の自発的活動		合計
			なし	あり	
小中高時代に課された活動内容	地域での活動	N	226	94	320
		%	(37.7%)	(54.3%)	(41.5%)
	体育・スポーツ活動	N	38	32	70
		%	(6.3%)	(18.5%)	(9.1%)
	文化・芸術活動	N	31	20	51
		%	(5.2%)	(11.6%)	(6.6%)
	イベントの手伝い	N	35	27	62
		%	(5.8%)	(15.6%)	(8.0%)
	自然・環境保護に関する活動	N	383	120	503
		%	(63.9%)	(69.4%)	(65.2%)
	国際交流・協力に関する活動	N	18	14	32
		%	(3.0%)	(8.1%)	(4.1%)
	社会福祉に関する活動	N	71	24	95
		%	(11.9%)	(13.9%)	(12.3%)
	保健・医療・衛生にかんする活動	N	8	5	10
		%	(1.3%)	(1.2%)	(1.3%)
	災害救助活動	N	5	3	8
		%	(.8%)	(1.7%)	(1.0%)
計			599	173	772

4. 考 察

冒頭に掲げた問題について次のことが明らかになった。第1に、ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間には大きなギャップのあること。第2に、自発性をともなわない社会奉仕活動を学校教育に導入しても、必ずしも将来の自発的ボランティア育成につながらないこと。

一つめの結論のもととなったボランティア団体対象の調査と大学生対象の調査は同時期に実施されたのではなく、4年ほどの時間差があるが、得られた結論は次の2点から正当化される。まず、用いた44項目に関する因子構造がおおよそ共通であった。また、4年の間にボランティア気運が高まったことは、ボランティア団体側のボランティア志望者を見る目を厳しくこそすれ、誰でもよいという方向には甘くなっていないことがある。それは単なる需給バランスからも示唆されるし、この4年の間に受け入れたボランティア志願者における質のばらつきにはボランティア団体側も相当ショックを受け、面接など受け入れ条件などの厳格化を図った様子がある。

中教審から答申されたように、社会奉仕活動を初等中等教育で義務化することが果たして将来のボランティアを生み出すことになるかという問題の解は、厳密には今後の社会実験にゆだねられるものである。ここでは、大学生の回顧的な回答をもとに事後的分析を行った。小中高でおこなった

社会奉仕活動の自発性を問われた大学生が、当該時点でボランティアをしていれば、過去の活動についても義務的ではなく自発的なものとして想起しやすくなることはあるかもしれない。そういった調査技法上の難点もあるが、現在入手可能なデータの分析からは、中教審の考えは全面的に支持されるものではなく、活動内容に相当工夫の必要なことが示唆された。本調査では、小中高それぞれの教室や現場でどのように社会奉仕活動が取り組まれているかまでの詳細は扱えておらず、あくまで外形的なものにとどまる。が、活動の詳細な内容は不明であれ、小中高時代の「体育・スポーツ活動」、「文化・芸術活動」、及び「イベントの手伝い」等の社会奉仕活動は大学生のボランティア活動促進につながる可能性が示された。

今後さらに追究すべき課題として、次のものが挙げられる。1つは、地域や学校などで課された活動を義務的に行う段階から自ら進んでボランティア活動を開始する段階へ移行するメカニズムである。そのためには、現に活動をしているボランティアに対する詳細な聞き取り調査をしないといけない。と同時に、2つめの課題として「自発性」なるものの概念的整理を行う必要がある。「自発性」とは必ずしも2値的なものではない。活動をするかしないかの意思決定にとどまらず、活動のメニューややり方を自ら決めるということもまた「自発性」を構成する。「自発性」の次元やレベルを区別し、ある次元やレベルでの自由な意思決定が、別の次元やレベルでの「自発性」醸成を促すといった仮説も検討しなくてはならない。

注

- 1) 佐々木正道, 2003, 「大学生のボランティア活動と受け入れ施設・団体の対応に関する意識と実態」, 佐々木正道編著『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房, 第6章, 288-289.
- 2) 古川秀夫・大山治彦・大東貢生, 2002, 「国際ボランティアの諸問題」, 古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』思文閣, 第Ⅱ部
- 3) 古川秀夫, 2002, 「活動内容とボランティアニーズ」, 古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』思文閣, 第Ⅱ部第6章
- 4) 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫, 2004, 「ボランティア活動の動機における内発性と外発性」, 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第6号, 龍谷大学社会文化研究所